

優良な生薬

生薬栽培の伝統

日本最古の朝廷がおかれた奈良県は、古来からのくすりの原料である生薬とも深い関わりをもっています。疫病に備え、大和を中心とする近畿地方で薬用植物が栽培されたほか、中国等の諸外国から渡来の生薬も大和に集まりました。

また歴史的な要因だけではなく、地質的にも恵まれた奈良県は、種々の生薬の栽培に適した環境にありました。周囲を山地に囲まれ、十分な降水、夏期の暑さと冬期の寒冷、積雪の少なさなどです。

江戸時代に入って漢薬の需要は高まり、日本国内における自給自足対策として、中国産の薬用植物の種苗を輸入する一方、山野に自生する薬草、薬木の類を調査、採集し、それらを栽培化する試みが盛んにおこなわれました。特に、八代将軍吉宗は、諸国に薬草栽培を奨励しました。そういった状況において、古くから薬用植物の栽培が行われてきた大和地方（奈良県）は、重要な一地域となりました。そして、より日本人の体質に合った、優良な生薬の種苗が育てられ、栽培されました。



森野旧薬園から見た宇陀市



葛の花（奈良県薬事研究センター提供）



文部省指定史蹟森野薬園鳥瞰図
（森野旧薬園提供）

明治時代になると、北海道では開拓政策のもとで、薬用植物の大規模な栽培化が行われ、国内での生薬の栽培の中心は北海道となりました。しかし、大和地方を中心として育まれた国内種苗とは、気候風土等の条件が異なり、またなるべく手間をかけない大量生産が中心となったため、それまでの品種とは違う生薬が栽培されることが多くおこりました。従来の品種は、奈良県などの篤農家の間で、ごく僅かに維持されているといった状態です。また他の品種との自然交配によって、純粋な品種が失われるという問題もあります。こういった状況を憂慮して、日本東洋医学会などで国内優良種苗の保存事業が行われています。

江戸時代における奈良県での生薬生産

『大和誌』（1736年）によると、宇陀、高市、宇智、吉野など南大和の諸郡で、地黄、当帰、人参、大黄などを産出すると記されています。また、森野家（後述）三代目好徳の記録（18世紀末～19世紀初め）によって、当時どのような薬草が作られたり、採られたりしていたかがわかります。栽培の方は、地黄、川芎、当帰、紅花、芍薬、白芷、黄芩、牛膝、牡丹、人参、延胡索、貝母、烏薬、玄参、淫羊藿などです。一方、野山に自製していたものとしては、羌活、独活、前胡、龍胆、桔梗、沙参、遠志、山芍薬、葛根などです。

見慣れない生薬名が多いと思いますが、興味のある方は、書籍などで調べてみてください。

おおぶかとうき やまととうき 大深当帰 (大和当帰)

当帰はセリ科の植物で、生薬としては、代表的な婦人薬です。血の道症などに効果があり、当帰芍薬散などが有名です。

日本では、17世紀の中頃から大和や山城地方で当時大和地方に野生していた深山当帰系のを栽培し、当帰として利用し、今日の大深当帰となったと考えられています。

この当帰は栽培に手間がかかるため、現在では奈良、和歌山両県境にわずかに栽培されているだけになっています。

国内生産全体では、栽培しやすく作柄が大きい品種である北海当帰が、北海道を中心にして栽培されており、大部分を占めていますが、品質は大深当帰の方が良いとされています。



トウキ (奈良県薬事研究センター提供)



やまとしゃくやく 大和芍薬

芍薬が日本に渡来したのは奈良時代といわれており、室町時代に栽培の記録(1445年)があります。

姿の美しい芍薬は、園芸種として非常に多くの品種があります。一方、どの品種が薬用に適しているかという研究は、現在もなされているところです。今のところ日本では、奈良県で長年、薬用とされてきたものが、最高級とされています。

奈良県産の芍薬が、現在のような栽培品種として確立されたのは、享保年間といわれています。大和の芍薬は、当時山地に自生していた山芍薬と、長崎・鹿児島などを經由してオランダから導入された品種を交配して作り出されたと考えられています。

この芍薬は、薬用として優れた品種なのですが、種から栽培することができないという特徴があります。つまり、株分けでしか繁殖させることができません。そのため大量に増やすことが難しく、ごく一部の篤農家によって栽培が続けられているという状況にあります。



シャクヤク (奈良県薬事研究センター提供)



あかやじおう 赤矢地黄

古い時代に、中国から日本に渡来し、平安時代には山城の国（京都府南部）で栽培されていたという記録が、延喜式に残っています。奈良県に縁のある薬草で、江戸時代にはすでに栽培されていました。現在でも「地黄町」という地名が残っている（橿原市）ほどです。

漢方では、補血、強壯薬として用いられ、八味地黄丸が有名です。日本で栽培されている地黄には、もう一つ懐慶地黄という品種があります。こちらの方が大型で、また栽培も比較的容易なため、国内の栽培の主流となっています。しかし、薬効など、生薬としては、赤矢地黄の方が良質といわれており、希少価値ということもあり、高い値段がつきます。



アカヤジオウ（奈良県薬事研究センター提供）

ぼたんぴ 牡丹皮

わが国の牡丹の渡来は、聖武天皇の御代（724）に空海が中国から持ち帰ったのが最初といわれています。牡丹は薬用として渡来し、奈良朝時代には専ら薬用に供されていましたが、花の美しさから、次第に鑑賞用になりました。（室町時代の書『仙伝抄』1540年）

奈良県初瀬の長谷寺は牡丹で有名ですが、寺の古文書には、元禄13年（1700年）に登廊の両側に牡丹を栽培せりとあります。

明治時代になると、それまで衰退していた

牡丹の栽培が再び盛んになりました。フランスで始まった、芍薬台に牡丹をつぎきして増やす方法が明治30年頃に日本でも行われはじめ、鑑賞用の牡丹の品種改良が進みました。しかし、根が芍薬である牡丹は薬用には用いることができません。

品質は、大和産（奈良県）と信州産（長野県）が上質であり、中国産の輸入品は、最近でこそやや良品が入ってきているものの、国内産には及びません。

国内での栽培生産・調製加工の技術と、優れた種苗を今後も維持していく必要がありますが、奈良県ではほとんど栽培されていないのが現状です。



ポタン（奈良県薬事研究センター提供）

せんきゅう 川芎

せんきゅう
川芎は、寛永年間（1624～1643）に長崎へ渡来し、大和（奈良県）において多く作られました。明治時代になって、仙台あるいは山形から北海道に導入され、現在では北海道が主生産地になっています。



センキュウ

県内の主な薬草園

● もりのきゅうやくえん 森野旧薬園

奈良県宇陀市大宇陀区上新1880（入園料必要）

TEL 0745-83-0002

<http://www.morino-kuzu.com/kyuyaku/>



森野旧薬園

やまと しょうぐんよしむね ばくふ
大和では、将軍吉宗の時代に、幕府のさいやくしうえむらさへいじまさかつ やくそうさいしゆ
採薬使植村佐平次政勝による薬草採取
りよこう
旅行が行われました（1729年）。

これに随行した森野藤助は、その後幕府から薬草6種を拝領して、自ら採取した薬草とともに、（現在の宇陀市にある）自宅の背後にある台地の畑に栽培しました。こうして始まったのが森野旧薬園です。薬園では、唐種を中心とした貴重な薬用植物の栽培が行われました。藤助に始まって、森野家は代々薬草の研究と薬園の整備に努めたため、現在でも、数少

ない民間の薬草園として続いています。（この当時、森野旧薬園以外にも、下市において願行寺薬園、ほりいけやくえん
堀池薬園などの薬草園がありました。）森野旧薬園は、台地の斜面という自然の地形を生かして、植物の栽培を行っています。

また、薬園の一角には、藤助が隠居してから研究に励んだ書斎兼薬草研究所である、「桃岳庵」があります。森野藤助の自宅は、葛の加工場となっており、冬期には現在も作業が行われています。

● 春日大社神苑萬葉植物園

奈良県奈良市春日野町160（入園料必要）

TEL 0742-22-7788

http://www.kasugataisha.or.jp/h_s_tearoom/manyous/

昭和7年に萬葉集にゆかりの深い春日野の地に昭和天皇の御下賜金を頂き、約300種の萬葉植物を植栽する、我国で最も古い萬葉植物園として開園されました。

現在は山野にいのちを芽生えさす草木もなるべく人的な手を加えず、自然のままに生かし、参拝者に安らぎを与える『春日大社神苑萬葉植物園』として親しまれております。

約3ヘクタール（9,000坪）の園内は、萬葉園・五穀の里・椿園・藤の園に大きく分けられています。萬葉園の中央には、萬葉時代の庭園を思わせる造りの池があり、その池の中央の中ノ島には『臥龍（がりゅう）のイチイガシ』と呼ばれる老巨樹（奈良市指定文化財）が幹を地に長く臥せて繁っています。

園内中央部の浮舞台では、5月5日（祝）、11月3日（祝）と春秋2回、奈良時代より絶えることなく、絢爛豪華な王朝の風情も伝承されてきた雅楽・舞楽が「萬葉雅楽会」として奉納されます。園内の南端には、春日大社の社紋が藤の花であることから『藤の園』が造られ、20品種・約200本もの藤の木が植栽されています。



春日大社神苑萬葉植物園（春日大社神苑萬葉植物園提供）



春日大社神苑萬葉植物園（春日大社神苑萬葉植物園提供）

●田村薬草園（田村薬品工業株式会社）

奈良県御所市西寺田50（見学申し込み必要）

TEL 0745-66-1521

<http://www.tamura-p.co.jp/yakuso/guide.html>



田村薬品工業株式会社薬草園（田村薬品工業株式会社提供）

古くから、田村薬品工業のある御所は、薬草の産地でした。役行者が修験道の修業をしているとき、今に伝わる名薬「陀羅尼助」を作ったのも、ここから程近い葛城山麓だったと言われています。

薬用植物は、健康を願う人々の永い経験の積み重ねによって築き上げられた生活の知恵というべきもの。田村薬品工業の薬草園にも、その伝統は受け継がれ、今日も薬草の可憐な花が風に揺れ、いつか役に立つ日を待っています。

●奈良県薬事研究センター 薬用植物見本園

奈良県御所市605-10（随時見学可能）

TEL 0745-62-2376

http://www.pref.nara.jp/dd_aspx_menuid-1744.htm

奈良県薬事研究センターは、奈良県御所市に設置された県立の試験研究機関です。

奈良県における薬業の振興を目的として、様々な分析手法を用いた試験や、製剤試作の他、医薬品の微生物に関する試験を行っています。

薬業を通じた県民の保健衛生、社会福祉の向上に寄与することを目的として、良質な医薬品の流通のための医薬品の審査を行っています。

また、薬用植物見本園を設置し、薬用植物をより身近に感じてもらえるように、年に数回の公開も行っています。



奈良県薬事研究センター（奈良県薬事研究センター提供）